

吉塚10

—吉塚遺跡群 第12次調査報告—

2007

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから大陸よりもたらされる様々な東アジア文化を受け入れる窓口として栄えてきました。人・物の交流は盛んでその結果数多くの歴史的遺産が培われて今日に至っています。これらかけがえのない遺産を保護するという立場から、福岡市教育委員会では、市内の遺跡把握に努め、時には発掘調査をおこなって記録保存という形で、往事の有様を後世に伝えています。

本書は平成17年度におこないました、吉塚遺跡群第12次調査の内容について報告するものです。本書が市民の皆様の埋蔵文化財、ひいては地域の歴史に対する理解の一助となり、また考古学上、地域史上の研究資料としてご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の調査において費用の負担をはじめとするご協力をいただきました、中川雅雄氏をはじめとする関係各位に深く感謝申し上げます。

平成19年3月30日

福岡市教育委員会
教育長 植木 とみ子

—例 言—

- ・本書は福岡市教育委員会が2005年12月9日から2006年1月20日にかけておこなった吉塚12次調査（博多区堅粕5－440－1）の報告である。調査は藏富士寛が担当した。
- ・本書における輸入陶磁器の分類は以下の文献を参照した。
太宰府市教育委員会編『大宰府条坊跡』XV 太宰府市の文化財 第49集
- ・本書の編集は藏富士がおこなった。遺物の実測については米倉法子の手を煩わせた。
- ・本書における方位は磁北であり、遺構については、井戸（SE）、土坑（SK）、溝（SD）、ピット（SP）といった略号を使用している。
- ・本書に関わる資料は、この後福岡市埋蔵文化財センターに収蔵される予定である。
- ・尚、調査費の一部には国庫による補助を受けている。

目 次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 調査の経過	2
1. 吉塚遺跡群	2
III. 調査の記録	4
1. 調査方法、遺跡の状況	4
2. 第1面の調査	4
3. 第2面の調査	6
4. その他の遺物	12
IV. まとめ	14

挿 図 目 次

図 1 周辺の遺跡 (1/25,000)	2
図 2 吉塚遺跡群 (1/4,000)	3
図 3 吉塚12次調査地点 (1/200)	3
図 4 第1面遺構配置 (1/80)	5
図 5 第1面SK (1/60)	6
図 6 第1面SK出土遺物 (1/3)	7
図 7 第2面遺構配置 (1/80)	8
図 8 第2面SK・SP (1/60、1/3)	9
図 9 SE047・049 (1/40)	10
図10 SD (1/80、1/40)	11
図11 SD出土遺物 (1/3)	12
図12 第2面遺構検出中出土遺物 (1/3)	13
図13 第1面掘下げ中出土遺物 (1/3)	14

図 版 目 次

図版 1	上 調査区南側第1面 (南西から)
	中 調査区北側第1面 (南から)
	下 調査区北側第1面 (北東から)
図版 2	上 調査区南側第2面 (南西から)
	中 調査区南側第2面 (北から)
	下 調査区南側 (一部) 第2面 (南東から)
図版 3	上 調査区北側第2面 (北東から)
	下 調査区北側第2面 (南から)
図版 4	上 SE047 (北西から)
	下 SE049 (南東から)
図版 5	上 調査区南側SD040・041・015 (南東から)
	中 調査区北側SD050・040・041 (北西から)
	下 SD040土層 (北西から)
図版 6	出土遺物

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成17年10月14日、株式会社コマーシャル・アールイーより、博多区堅粕5丁目440-1における共同住宅建設に関して、埋蔵文化財の有無に関する照会がなされた。この地点は吉塚遺跡群の範囲内であることから、埋蔵文化財課では試掘調査をおこない、現地表下80cmで遺構の存在を確認した。

この結果を受けて、両者協議の結果、遺跡への影響は避けられないということになり、遺跡の記録保存という形での対応が採られることとなった。発掘調査の開始は12月9日。翌年1月20日にすべての作業を終了した。調査に当たっては、中川雅雄氏をはじめとする関係各位に多大な協力を賜った。記して感謝したい。なお、調査費の一部には国庫補助を受けている。

2. 調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

調査委託 中川雅雄

調査主体 福岡市教育委員会

平成17年度

調査総括 埋蔵文化財課 課長 山口譲治
調査2係長 池崎譲二
調査庶務 文化財整備課 管理係 鈴木由喜
調査担当 埋蔵文化財課 調査2係 藏富士寛
調査作業 阿部幸子 小池温子 幸田信乃 小路丸嘉人 指原始子 寺園恵美子 中野裕子
永田律子 夏秋弘子 早川 浩 藤野雅基 増田ゆかり 吉川暢子

平成18年度

総 括 埋蔵文化財第1課 課長 山口譲治
調査係長 山崎龍雄
庶 務 文化財管理課 鈴木由喜
整理担当 埋蔵文化財第1課 調査係 藏富士寛
整理作業 柴田加津子 萩本恵子 日名子節子

遺跡調査番号	0555	遺跡略号	YSZ-12		
地 番	博多区堅粕5-440-1	分布地図番号	博多駅 36		
開 発 面 積	290.91㎡	調査対象面積	138.97㎡	調査面積	126.1㎡
調 査 期 間	2005. 12. 9～2006. 1. 20				

Ⅱ. 調査の経過

1. 吉塚遺跡群

吉塚遺跡群は御笠川下流域に位置し、博多湾に沿って形成された砂丘上に立地する、弥生時代中期から中世にいたるまでの複合遺跡である。砂丘上には吉塚遺跡群のほか、博多遺跡群、箱崎遺跡群、吉塚祝町遺跡、吉塚本町遺跡、堅粕遺跡など数多くの遺跡が展開しており（図1）、弥生時代から中・近世にいたる様々な遺構、遺物が存在している。列島各地のみならず、大陸・半島とのつながりの深い文物の出土も多く、福岡市域における海を介した様々な交流を語る上で、これら海浜部の遺跡群は欠くことのできない、重要なものであるといえる。

当調査地点は吉塚遺跡群の南西端部にあたり、現在の御笠川は至近の位置にある。周辺では北東側に近接して第11次調査、東側50mほどの位置では第6次調査がおこなわれている（図2）。第6次調査では、古代（8世紀）や中世（11世紀後半～12世紀前半、13世紀後半～14世紀前半）の井戸、土坑、柱穴を検出したほか、弥生時代後期の銅鏃が3本出土している。また、「西甫」と墨書された白磁高台付皿も注目される出土遺物といえるだろう（佐藤編1998）。

佐藤一郎編1998『吉塚6』－吉塚遺跡群第6次調査の報告－ 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第555集

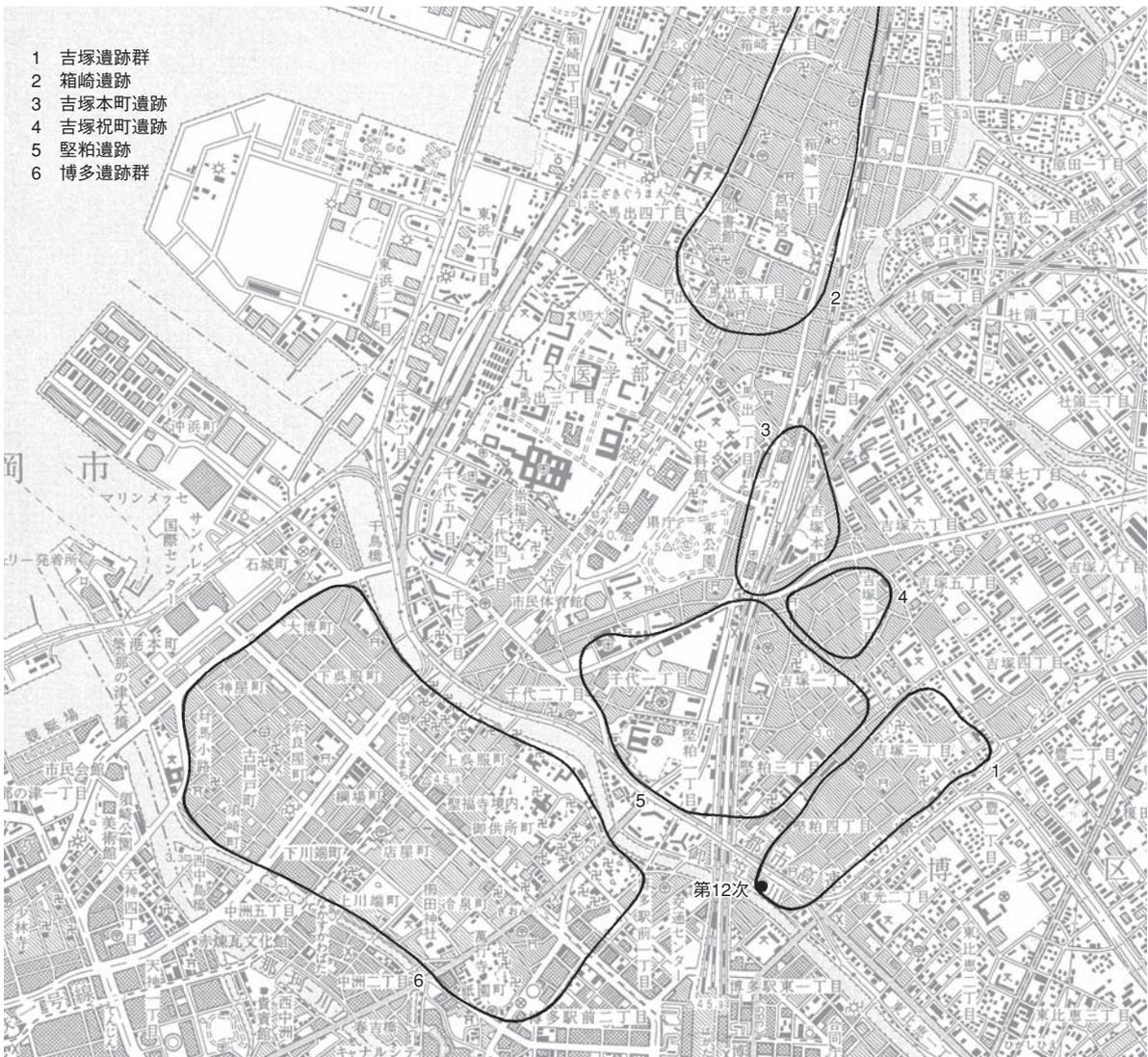


図1 周辺の遺跡（1/25,000）



図2 吉塚遺跡群 (1/4,000)

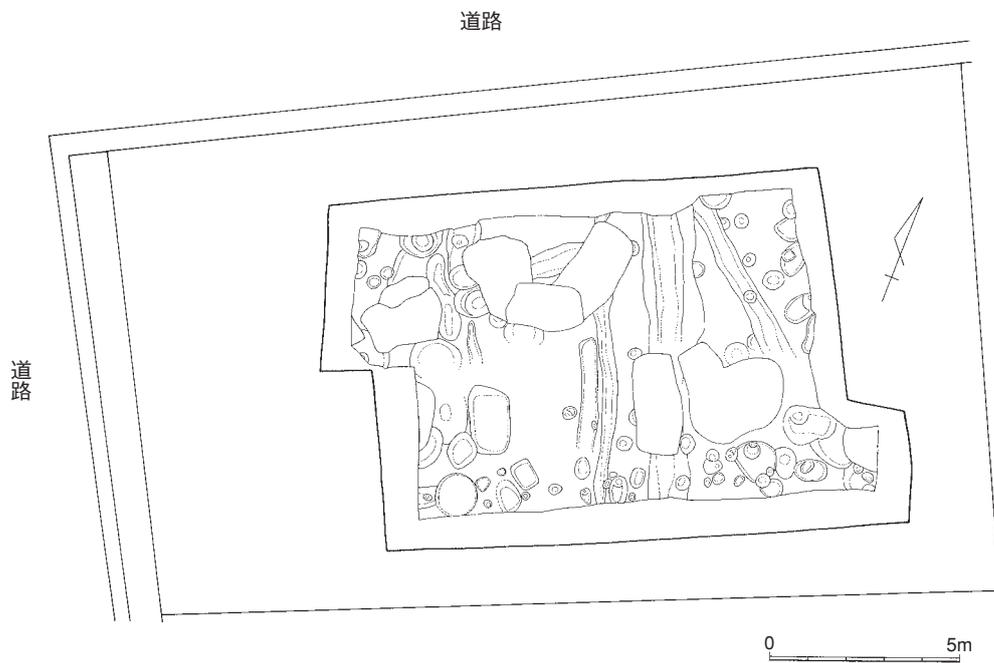


図3 吉塚12次調査地点 (1/200)

Ⅲ．調査の記録

1. 調査方法、遺跡の状況

調査はまず、表土剥ぎより開始した。攪乱や表土の除去を重機によって掘削し、表土下1m、標高3.2m付近の暗褐色砂層上を第1面とし調査を開始した。第1面調査終了後、人力による切り下げをおこない、表土下1.5m、標高2.7m付近において検出した黄褐色砂層（砂丘面）上を第2面として発掘をおこなった。この「面」は厳密な意味で、ある特定時期の生活面を示したものではなく、調査の過程に生じた便宜的なものであり、従ってそれぞれの「面」で検出した遺構は、時期の前後関係、その傾向を総体的に示したものに過ぎない。尚、最後には第2面の切り下げも行い、遺構の精査に努めている。この調査では、排土処理のため調査区を二分して調査をおこなっている。

今次調査地点は、攪乱を激しく受けており、遺構の遺存状況は良いものではない。遺物は輸入・国産陶磁器、須恵器、土師器、弥生土器等、コンテナ12箱分が出土している。

2. 第1面の調査

第1面は標高3.2m前後の暗褐色砂質土上に設定した。攪乱を激しく受けており、遺構の遺存状況は悪い。遺構の種類には、ピット(SP)、土坑(SK)がある。土坑は浅く、堀方のしっかりしないものがあり、土坑としての判断にためらわれるものも多い。総じて、遺構密度は薄いものといえる。

1) SK(土坑)・SP(ピット)

SK001(図4) 調査区東端に存在する土坑であり、径1.4m程の円形を呈する。図4-4の陶器甕底部片にみられるように、遺構は近世段階に位置づけられるものであるが、弥生～古墳時代の遺物もいくつか出土している。

出土遺物(図4-1～4) 1は須恵器杯蓋である。体部と天井部の境には弱い沈線を巡らし、口縁端部内面はわずかに凹む。古墳時代後期前葉。2は弥生時代後期の甕口縁部片。内・外器面にハケ目が残る。3は須恵器杯身である。立ち上がりは短く内傾する。古墳時代後期前葉。

SK024(図5) 調査区北東端部に存在する。不定形で、ごく浅いものである。遺構ではない可能性も高い。

出土遺物(図6-5・6) 5は弥生時代後期の甕口縁部片で、内・外器面にハケ目調整を施す。6は古墳時代前期の土師器頸部片である。外器面にはハケ目のち列点文を施し、内器面にはヘラケズリが認められる。

SK025(図5) 調査区北東側に認められるもので、浅く短い溝状を呈している。SD050である可能性が高い。

出土遺物(図6-7・8) 7は弥生時代後期初頭の甕口縁部片。8は滑石製小玉であり、径7mmを測る。

SK032(図5) 調査区中央やや北よりに位置し、大半を攪乱により切られている。深さ0.4mを測り、壁面の立ち上がりもしっかりとしている。遺物の出土はごくわずかであるが、弥生土器、須恵器と共に瓦質土器(図6-16)が出土しており、14世紀前後に位置づけが可能だろう。

出土遺物(図6-14～16) 14は弥生時代中期初頭の甕口縁部片。口縁端部には刻み目を施す。15は須恵器杯身。立ち上がりは短く、垂直方向に立ち上がっている。16は瓦質土器(器種不明)の底部片である。摩滅が激しい。

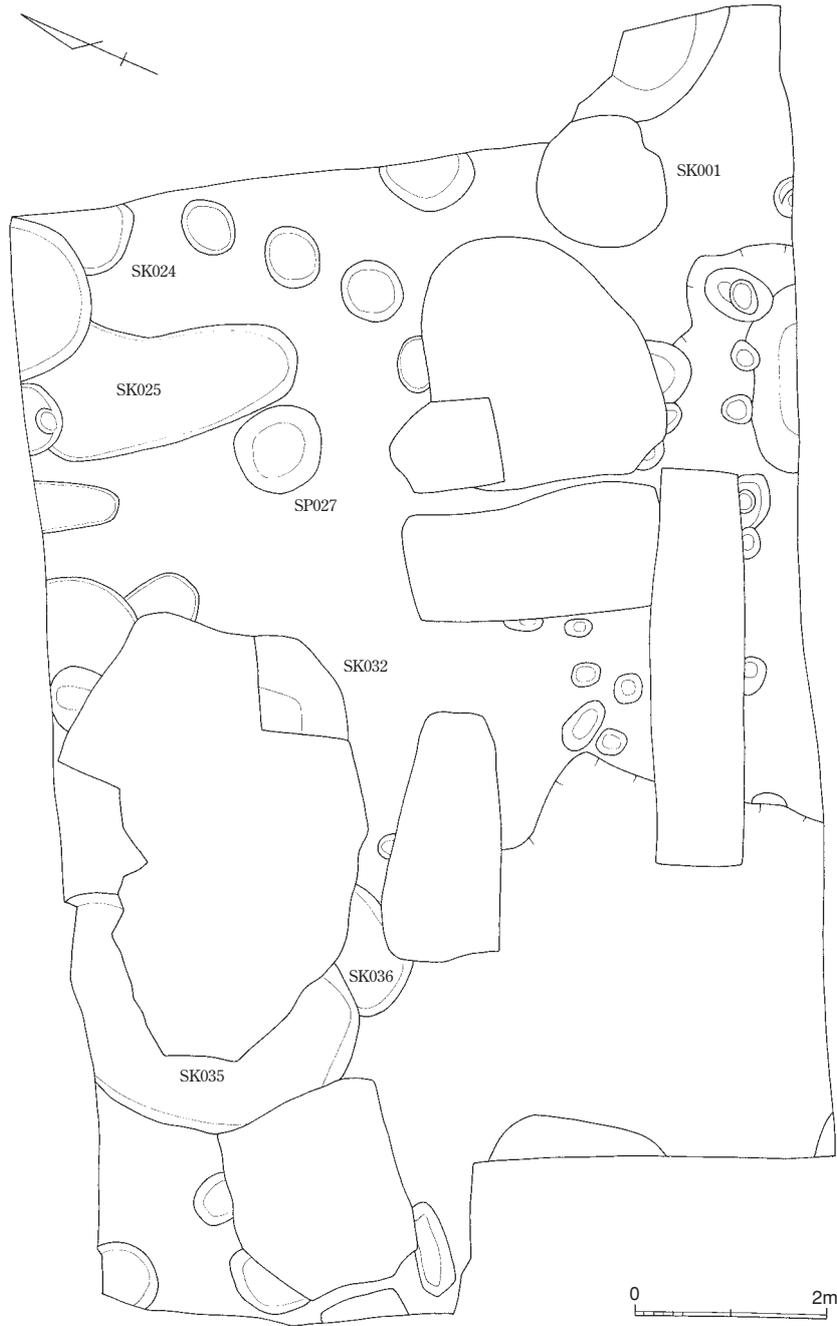


図4 第1面遺構配置 (1/80)

SK035 (図5) 調査区北西側に存在する土坑である。各所を攪乱に切り込まれているが、平面は3.6×2.4mの楕円形を呈するものと考えて良いだろう。深さは10～20cmで、ごく浅い。弥生土器、須恵器等の他、白磁が出土しており、この土坑は11世紀後半～12世紀前半に位置づけることができる。

出土遺物 (図6-9~13) 9~11は弥生土器。9は壺等の口縁部片。口縁部は断面T字状を呈し、外面に凹線を施す。10は後期の甕口縁部片。11は中期前半の甕口縁部片。12は須恵器杯底部片。13は白磁碗底部片。細く高い高台を有する。

SK036 (図5) 調査区中央やや北西寄りに存在するもので、多くを攪乱、SK035に切り込まれている。深さ10cm程のごく浅い土坑である。出土遺物から奈良時代に位置づけることができようか。

出土遺物 (図6-19・20) 19は須恵器杯身である。立ち上がりは高いが内傾する。全体的な作りは粗雑である。6世紀末～7世紀初頭に位置づけることができる。20は甕口縁部片である。口縁部はわずかに肥厚する。8世紀代のものであろう。

SP出土の遺物 (図6-17・18) SP出土遺物は小片が多く、図化困難なものが多い。17・18はSP027出土のものである。17は弥生時代後期の甕口縁部片。18は古墳時代後期後半の杯蓋天井部片である。

3. 第2面の調査

第2面は標高2.7m上の黄褐色砂層(砂丘面)上に設定している。遺構の種類には、溝(SD)、土坑(SK)、井戸(SE)、ピット(SP)がある。

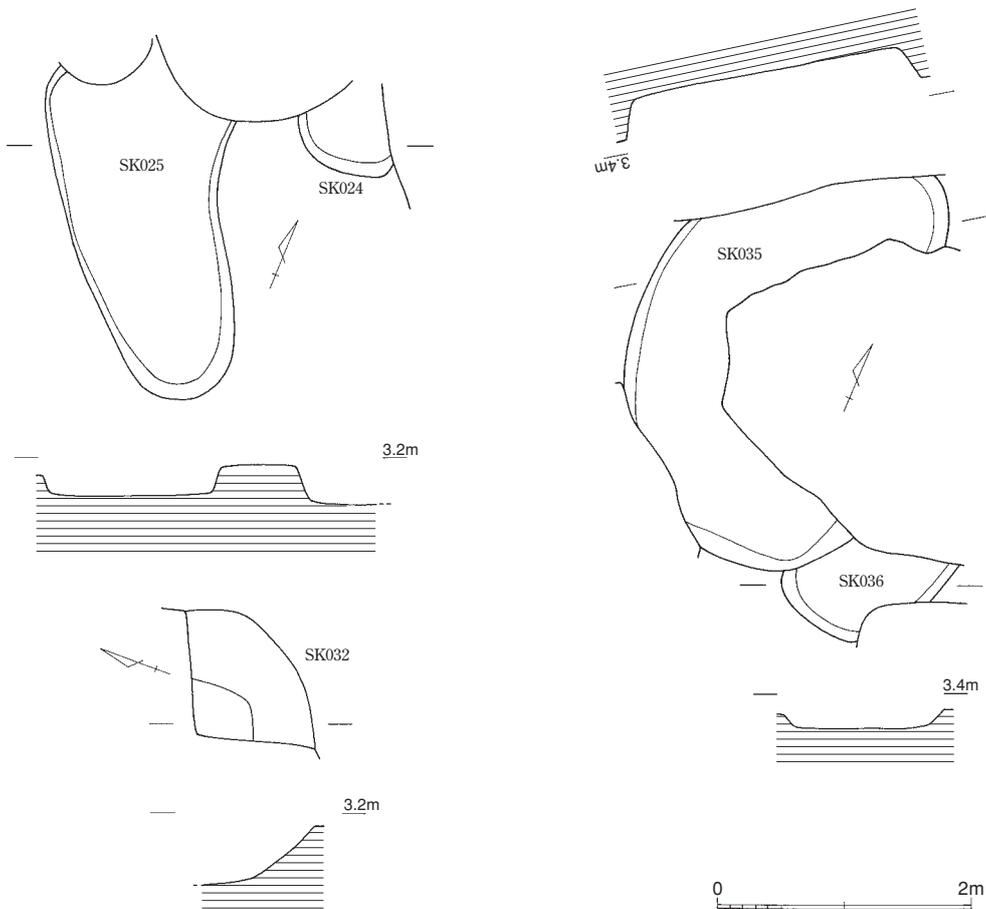


図5 第1面SK (1/60)

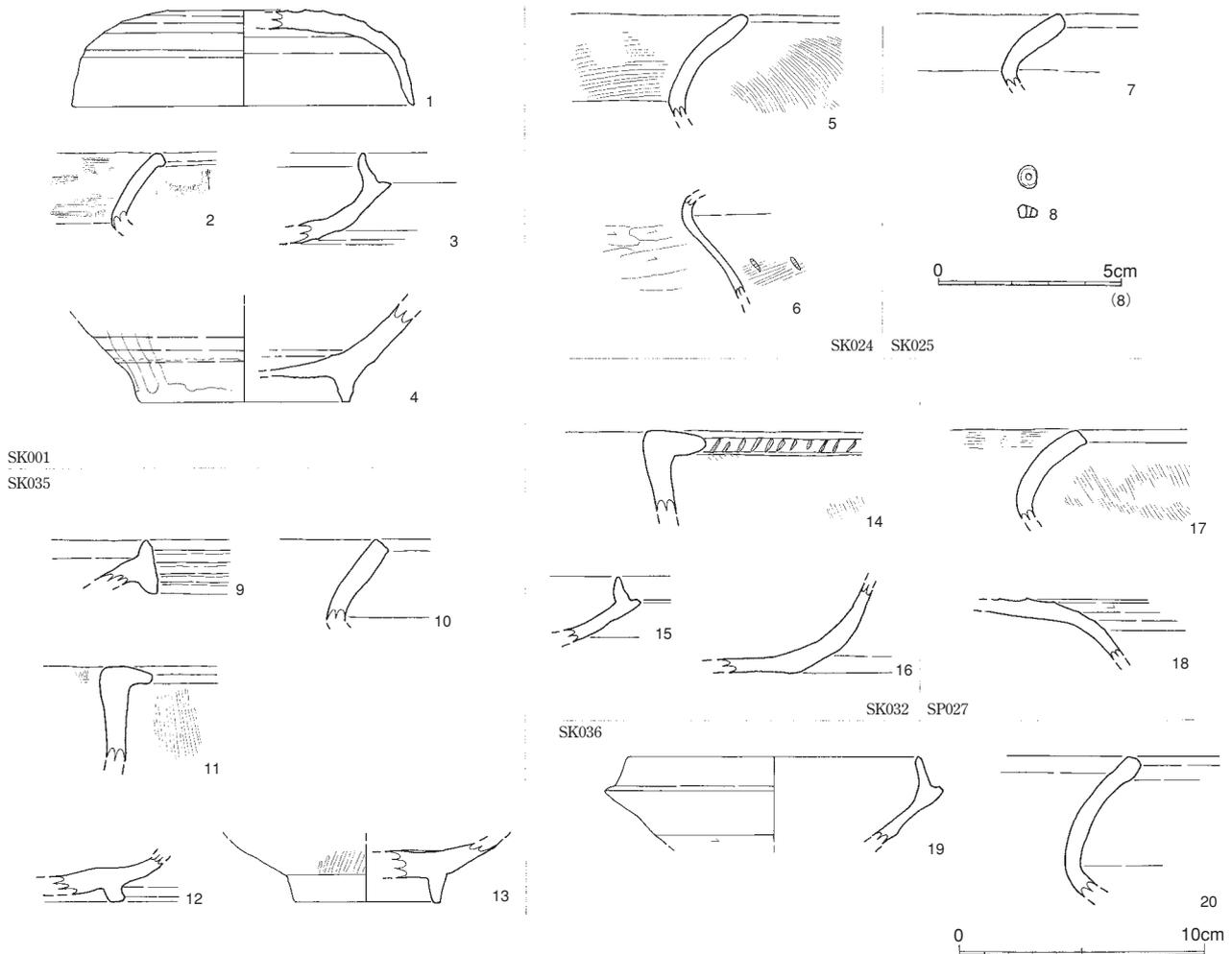


図6 第1面SK出土遺物 (1/3)

1) 土坑 (SK)・ピット (SP)

SK002 (図8) 調査区西側に存在する。1.8~1.1mの平面長方形を呈し、深さ0.3mを測る。出土遺物はごく少なく、年代の決め手に欠いている。

出土遺物 (図8-4) 4は黒色土器碗 (B類) の底部片である。全体の摩滅が激しい。

SK016 (図8) 調査区東端に存在する。攪乱およびSK001に切られ、全形は不明である。遺構の深さは20cmにも満たない。出土遺物はごく少なく、年代の決め手に欠いている。

出土遺物 (図8-3) 3は須恵器杯身の口縁部片である。立ち上がりは短く内傾する。

SK009 (図8) 調査区の東端に存在する。SK016およびいくつかのピットに切り込まれている。遺構の深さは20cmにも満たない。この土坑は埋土が淡褐色砂質土で、他の遺構と異なっている。また、弥生土器のみが出土しており、出土遺物から、遺構を弥生時代中期後半に位置づけておきたい。

出土遺物 (図8-5) 5は弥生時代中期後半の甕底部片である。平底で、外器面にはハケ目調整。
ピット出土の遺物 (図8-1・2・6・7) この第2面においてもピット出土遺物は少なく、また小片が多い。1・2はSP004出土遺物である。1は二重口縁壺の頸部片。外器面には斜め、内規面には横方向のハケ目が残る。2は高杯杯部片である。口径 (復元) 14.4cmを測る。6・7はSP043出土。6・7は土師皿である。いずれも底部は糸切りによる。7は口径 (復元) 12.6cmを測る。

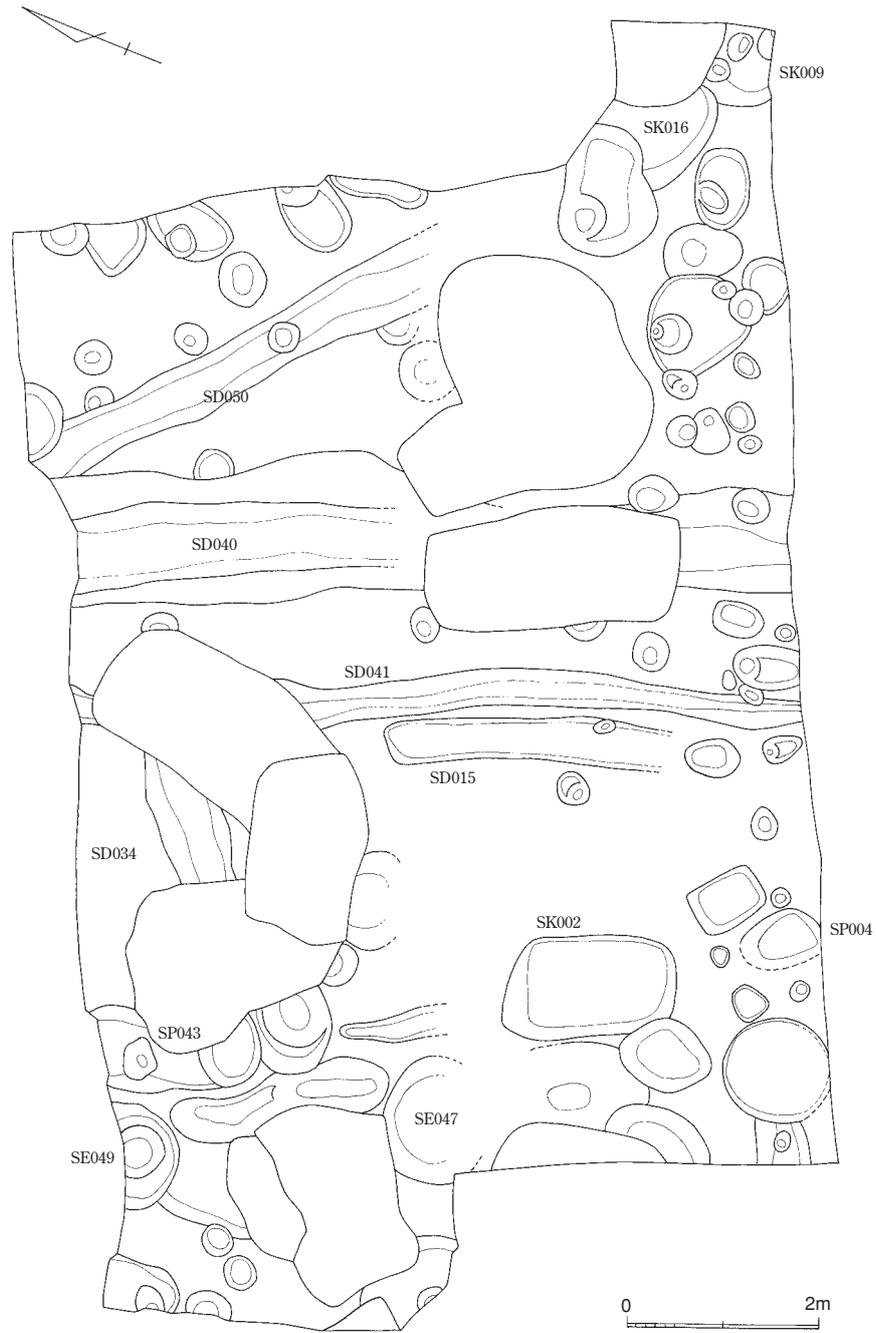


図7 第2面遺構配置 (1/80)

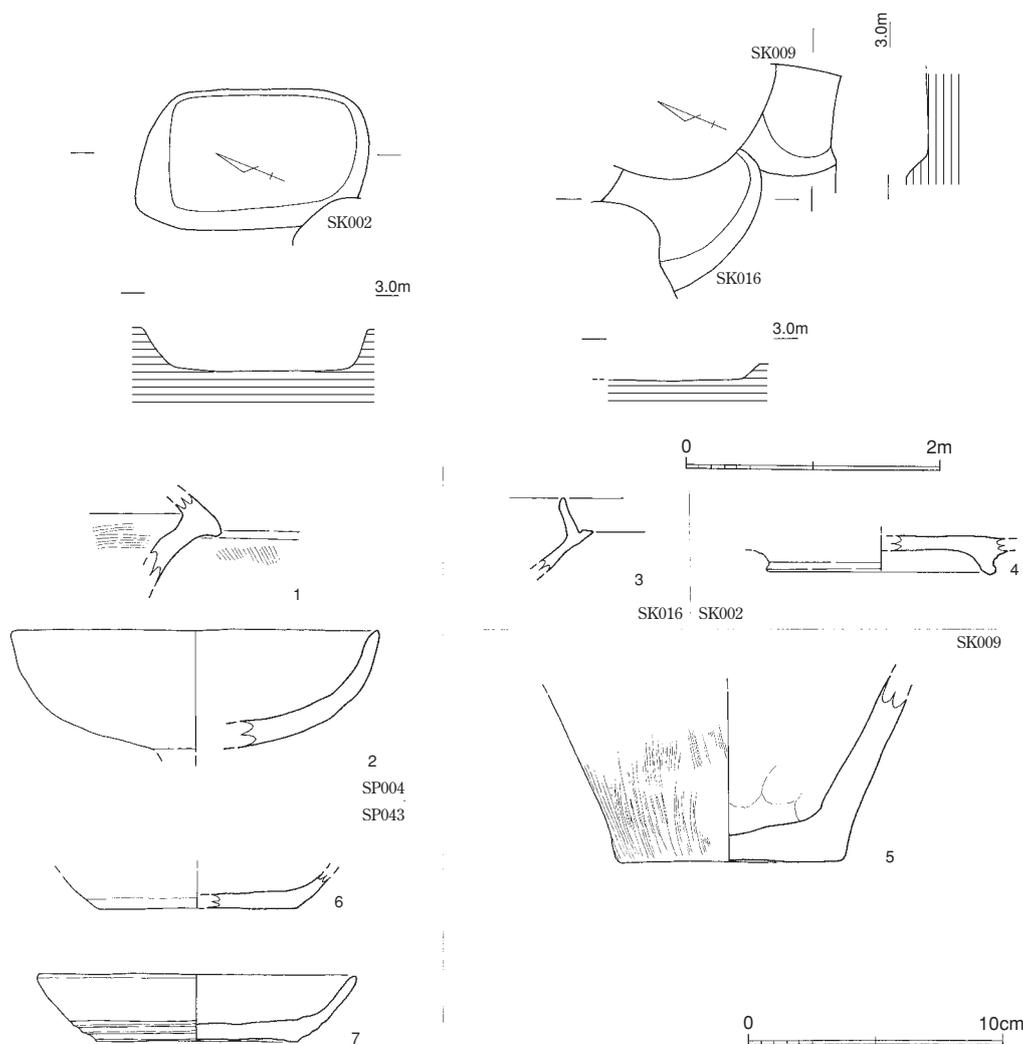


図8 第2面SK・SP (1/60, 1/3)

2) 井戸 (SE)

SE047 (図9) 調査区東側に存在する。平面は径1.4mの円形を呈し、底面の高さは標高2.4mである。掘り込みの壁面立ち上がりはゆるやかで、井戸の底面は広い。土層を観察した際、縦方向の不連続線が認められた。これが井戸側に相当するのだろう。井戸側は径0.7~0.8m程に復元できる。なお、この井戸からは木質等、井戸枠の痕跡は確認できなかった。出土遺物は限られ、時期の決め手に欠いているが、11世紀後半~12世紀の年代を考えておきたい。

出土遺物 いずれも小片で図化に耐えない。弥生土器、土師器等に混じり、白磁碗片が存在する。

SE049 (図9) 調査区北西端部に存在する。調査区内では、半ば程を確認することができた。平面は径1.1m程の円形を呈するものと考えられ、底面の高さは標高2.2mを測る。掘り込みの壁面立ち上がりは比較的急で、底面近くで段をなし、井戸の本体部分は更に深い位置にある。土層を観察した際、縦方向の不連続線が認められた。これが井戸側に相当するのだろう。井戸側は径0.4mにも満たないもので、SE047に比してかなり小さい。2段の掘り込み等、SE047とはいくつかの相違点が認められる。なお、この井戸からも木質等、井戸枠の痕跡は確認できなかった。出土遺物は限られ、時期の決め手に欠くが、いくつか出土している須恵器甕の存在から、8世紀代の遺構とみなしておきたい。

出土遺物 いずれも小片であり、図化はおこなっていない。弥生土器、土師器、須恵器が出土している。須恵器はいずれも甕の胴部片で、外器面には格子目のタタキ痕が認められる。

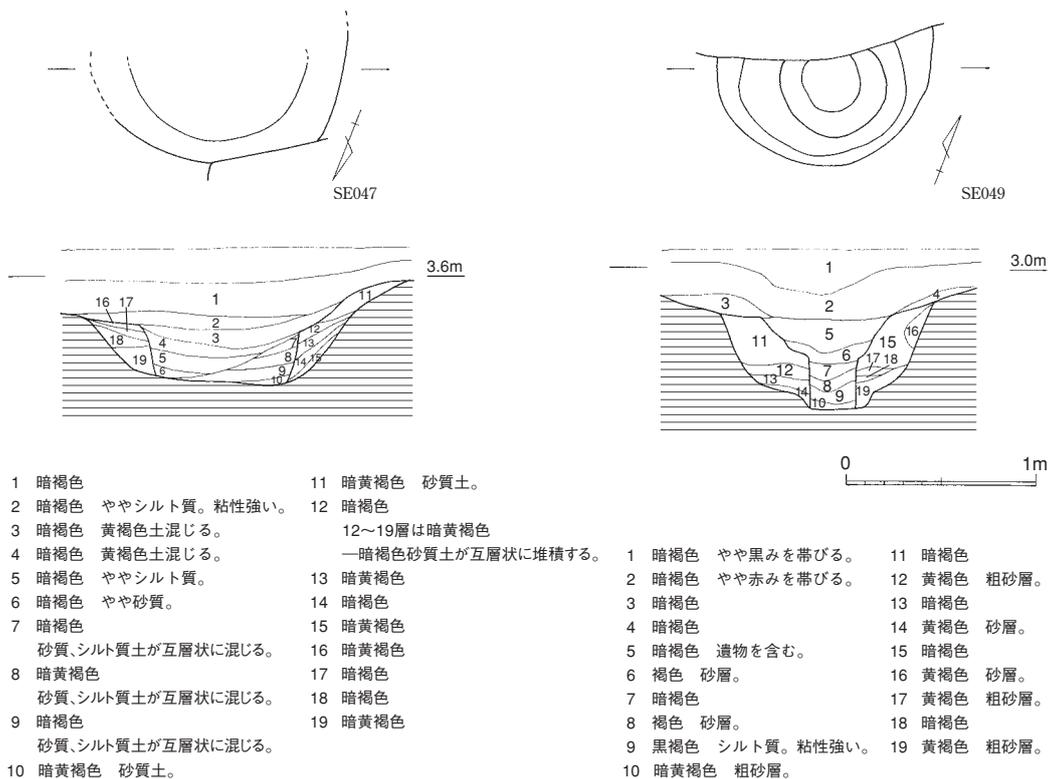


図9 SE047・049 (1/40)

3) 溝

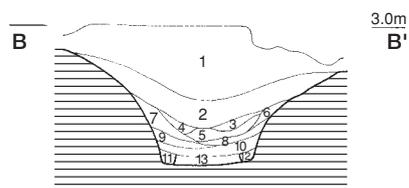
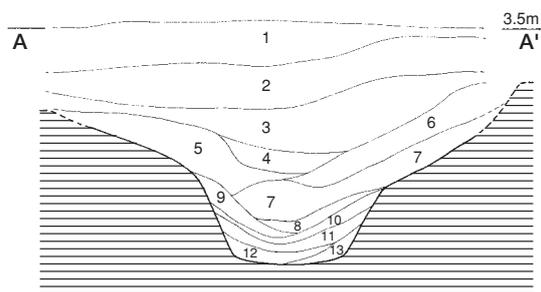
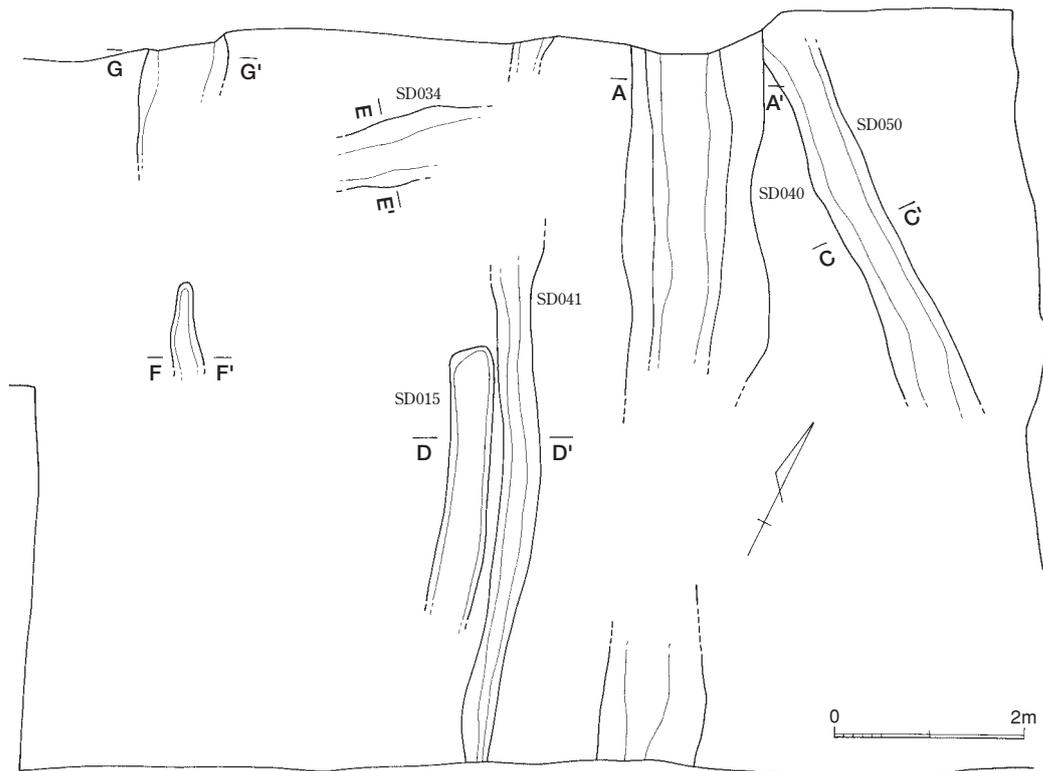
SD040 (図10) 調査区中央やや東寄りを北西-南東方向 (N-23°-W) にのびるもので、検出面での幅1.1~1.4m、深さ0.5m程を測る。調査区内において溝底面の高さに変化はない。溝の堀方は上半まで傾斜はゆるやかであるが、その半ば、底面より30~50cmの高さで変化をみせ、下方はほぼ垂直に近い落ち込みをみせる。溝のB-B'断面をみれば、底面直上の壁際に暗褐色土の存在が確認できる (11・12層)。これを板材等の有機質が存在した痕跡とみれば、この部分に土留めの存在を推定することができ、壁面の傾斜が変化する理由もこの点に求めることができるだろう。出土遺物より、遺構の時期は12世紀後半に求めることができる。

出土遺物 (図11-1~10) 1は弥生土器広口壺口縁部片。2~4は須恵器杯蓋 (2) 及び甕 (3・4)。5・6は漁獵関係の遺物 (5; 蛸壺、6; 石錘)。7~10は陶磁器。7は白磁碗底部片で、内面見込み部分の釉を輪状に掻き取っている。8は越州窯系青磁壺等の底部片。9は白磁碗口縁部片。口縁部には輪花を有し、内面には篋描文を施している。10は同安窯系青磁皿の底部片。

SD041 (図10) SD040の西側を平行してのびる溝で、幅0.2~0.4m、深さ0.3mを測る。溝の断面は逆台形を呈する。出土遺物より、古墳時代後期 (6世紀後半) を考えておきたい。

出土遺物 (図11-11~15) 11・12は土師器甕口縁部片、14は弥生時代中期後半の高杯基部片である。13は須恵器杯蓋の天井部片である。15は甌の把手。

SD015 (図10) SD041の西側に存在する。調査区の中央部に、3m程確認できたに過ぎないが、本来はSD041に平行して走っていたものであろうか。幅は0.4mでSD041とほぼ等しいが、深さは10cm程とごく浅い。出土遺物はごくわずかで、年代の決め手に欠ける。



- 1 暗褐色
- 2 暗褐色
- 3 褐色 砂層
- 4 褐色 砂層
- 5 暗褐色 砂層、汚れ激しい
- 6 褐色 砂層
- 7 褐色 砂層
- 8 褐色 砂層
- 9 黒褐色 シルト質、粘性強い。
- 10 黄褐色 白砂層
- 11 暗褐色 シルト質、粘性強い。杭の跡か。
- 12 暗褐色 シルト質、粘性強い。杭の跡か。
- 13 黄褐色 砂層

- 1 暗褐色
 - 2 褐色
 - 3 褐色 炭化粒含む。以下、SDの埋土
 - 4 褐色
 - 5 暗赤褐色
 - 6 暗赤褐色
 - 7 暗褐色
 - 8 暗褐色
 - 9 暗褐色
 - 10 褐色
 - 11 黄褐色
 - 12 暗褐色
 - 13 黄褐色 粗砂層
- 以下、遺物をほとんど含まない。

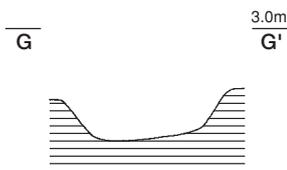
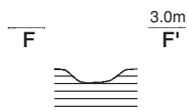
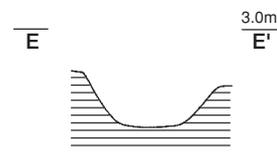
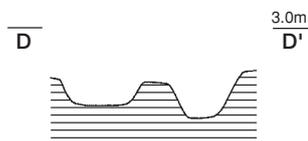
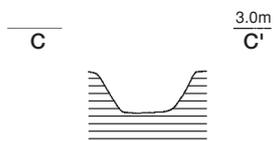


図10 SD (1/80, 1/40)

SD050 (図10) 調査区北側を北西 - 南東方向 (N-50°-W) に走る溝で、調査区隅でSD040に切られている。幅0.5~0.7m、深さ0.2mを測り、溝の断面は逆台形を呈する。出土遺物は少なく、年代の決め手に欠くが、ここでは古墳時代後期 (6世紀後半) を考えておきたい。

出土遺物 (図11-16・17) 16は弥生時代中期後半の甕底部片。17は須恵器杯身。6世紀後半。

4. その他の遺物

第2面遺構検出中の遺物 (図12) 1~6は弥生土器である。1は弥生時代中期後半の甕口縁部片。2は二重口縁壺の口縁部片。外面には波状文を巡らせている。3は弥生時代後期の甕口縁部片。4・5は弥生時代中期後半の壺胴部片。4は丹塗りで、4条の突帯を巡らせている。6は弥生時代中期後半の甕底部片。7・8は須恵器である。7は杯蓋、8は杯身で、いずれも6世紀前半。9は磨石。10は同安窯系青磁碗。11は瓦質土器の捏鉢。12は管状土錘、13は蛸壺である。

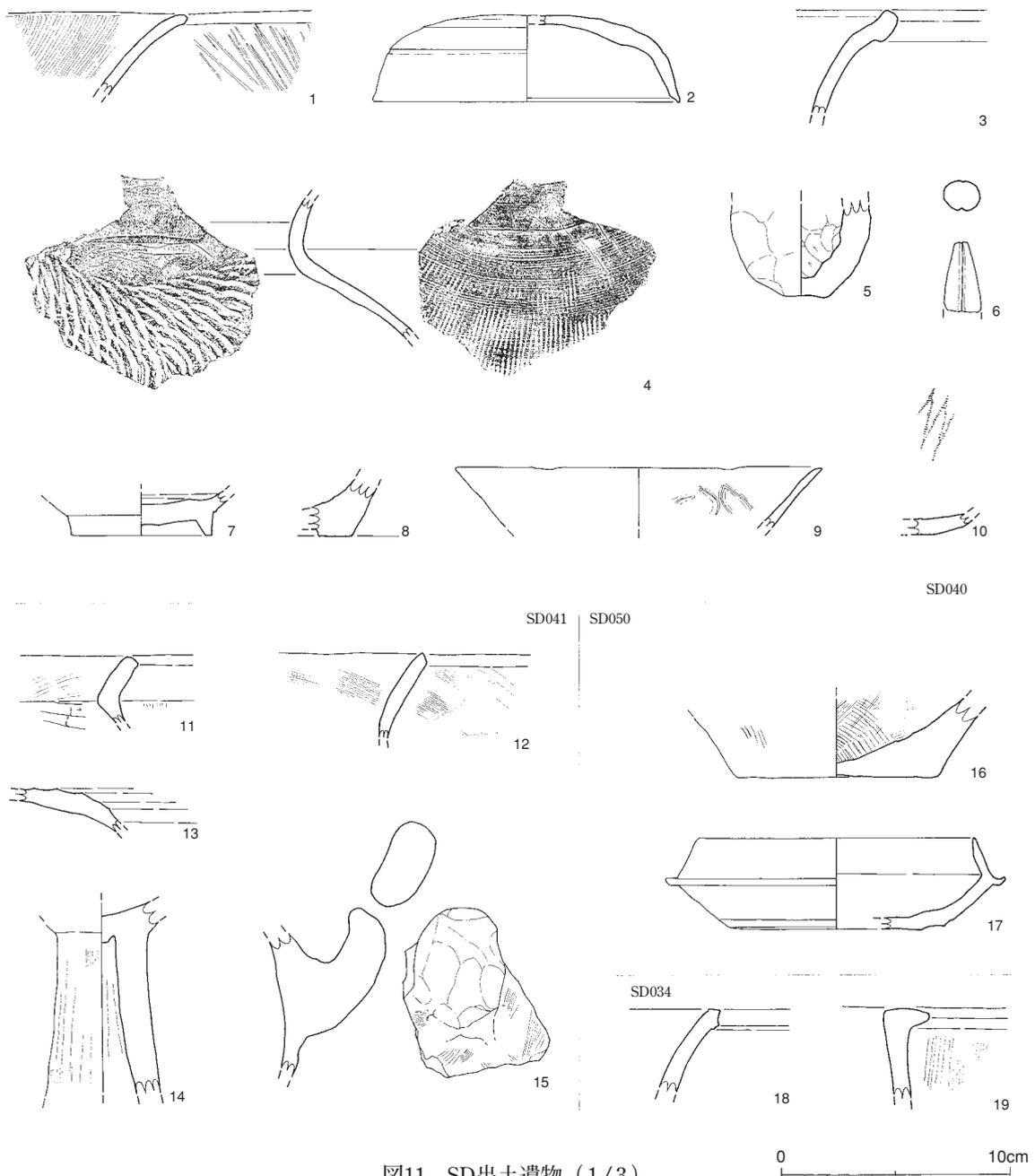


図11 SD出土遺物 (1/3)

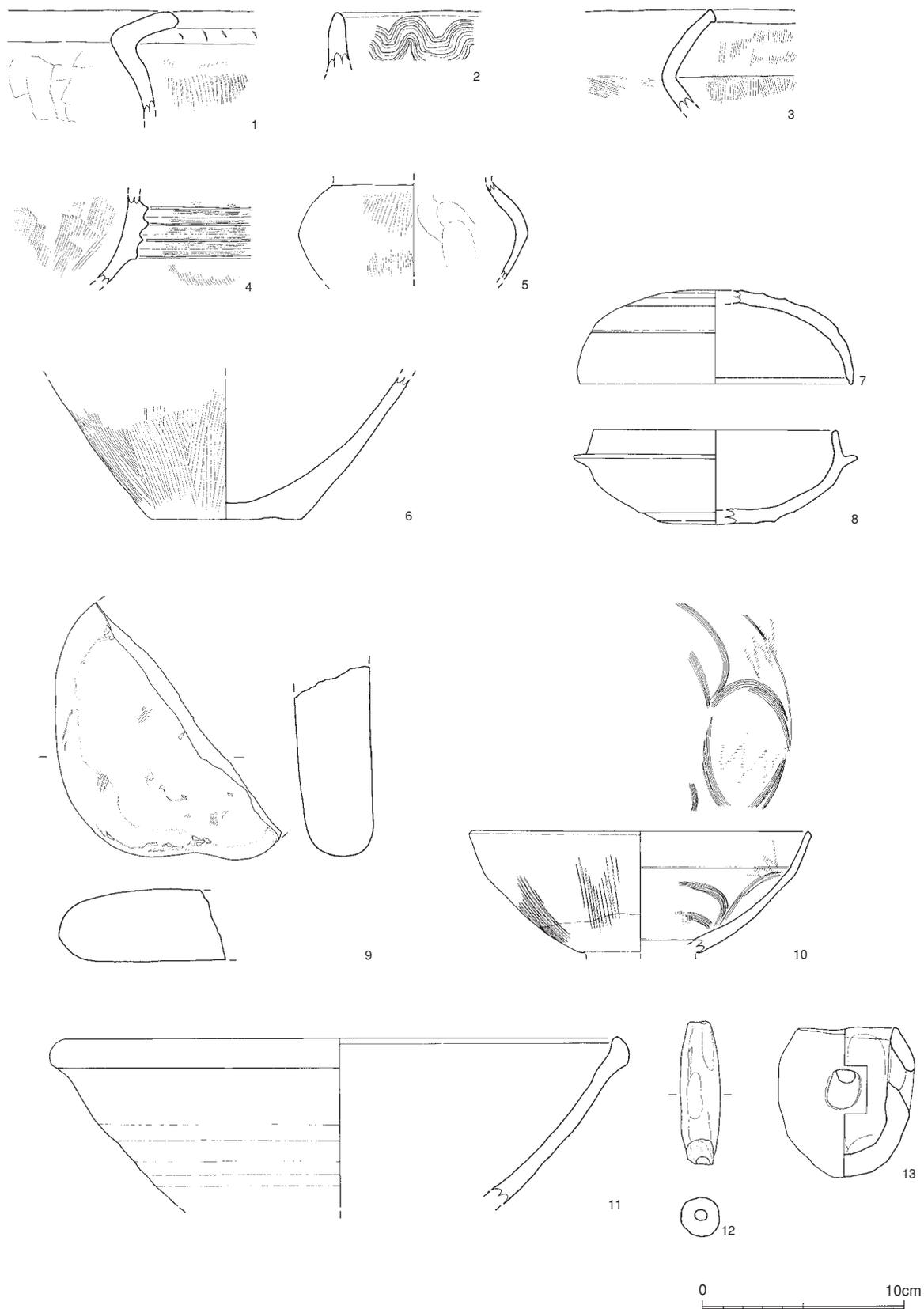


图12 第2面遺構検出中出土遺物 (1/3)

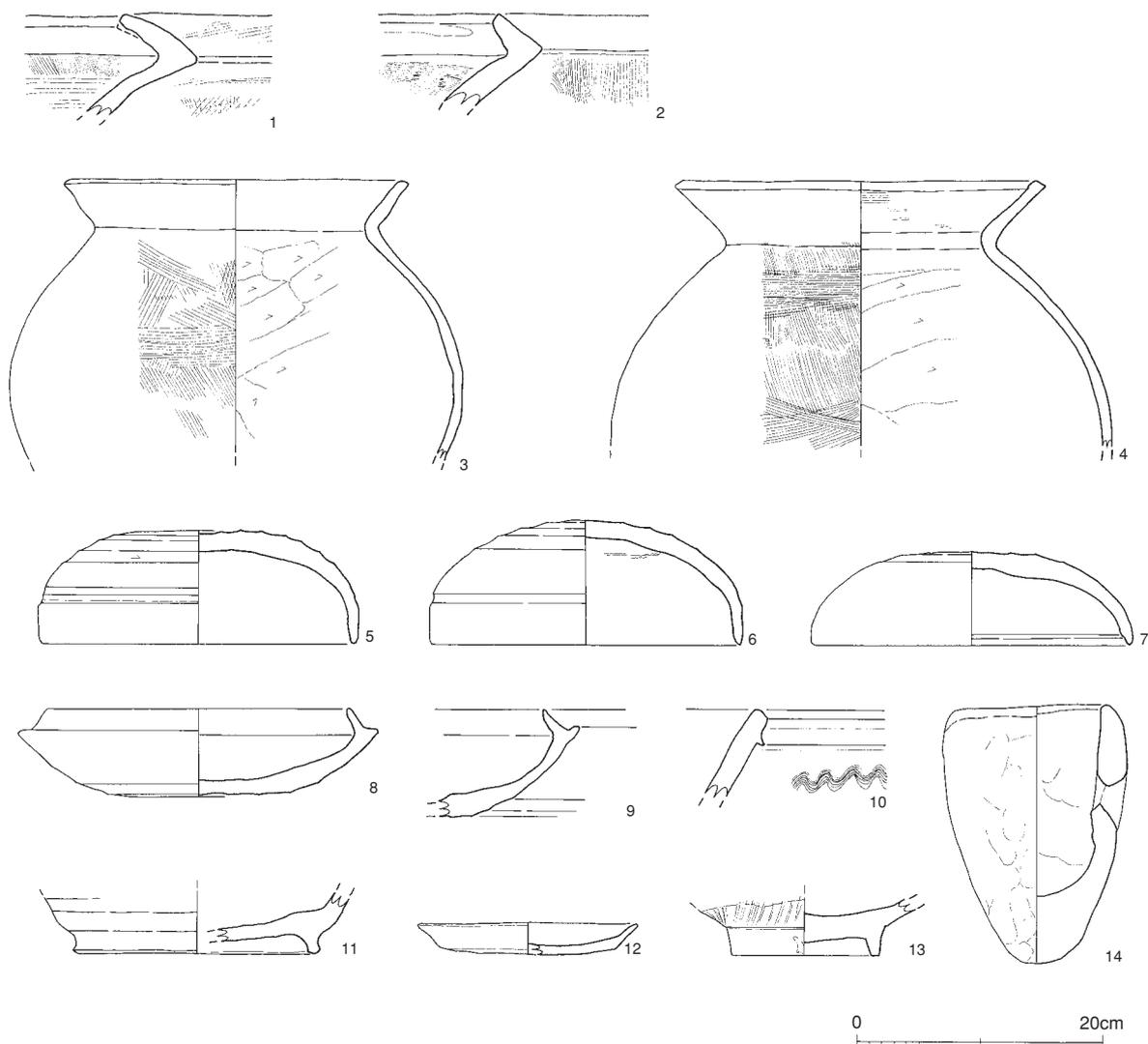


図13 第1面掘下げ中出土遺物（1/3）

第1面掘り下げ中の遺物（図13） 1・2は弥生時代後期の二重口縁壺口縁部片。3・4は古墳時代前期の土師器甕。5～10は須恵器である。5～7は杯蓋、8・9は杯身。10は甕口縁部片。口縁部下に突帯を有し、外器面には波状文を施す。11は土師器碗の底部片。12は土師器皿。口径8.8cmを測り、底面はヘラ切りによる。13は白磁碗。細く高い高台を有する。14は蛸壺。

IV. まとめ

今回の調査では不確実ながら第1面；中～近世、第2面；中世～古墳・弥生時代に至る遺構の存在を確認できた。しかし第2面における奈良・古墳時代の遺構は、第1面より掘り込みがなされていた可能性も高い。

当調査地点は、御笠川河岸に存在するにもかかわらず、安定した砂丘面と遺構を検出することができた。このことは、御笠川対岸にいたる、遺跡のさらなる広がりを示唆しているのかもしれない。また、今次調査においてはさほど顕著にみることはできなかったが、遺構面切り下げの際、弥生時代から古墳時代に相当する多くの遺物を採集しており、これは、周辺において当該期の遺構が数多く存在していたことを示しているのだろう。

調査区南側第1面
(南西から)



調査区北側第1面
(南から)



調査区北側第1面
(北東から)





調査区南側第2面
(南西から)



調査区南側第2面
(北から)



調査区南側(一部)第2面
(南東から)



調査区北側第2面（北東から）



調査区北側第2面（南から）



SE047 (北西から)

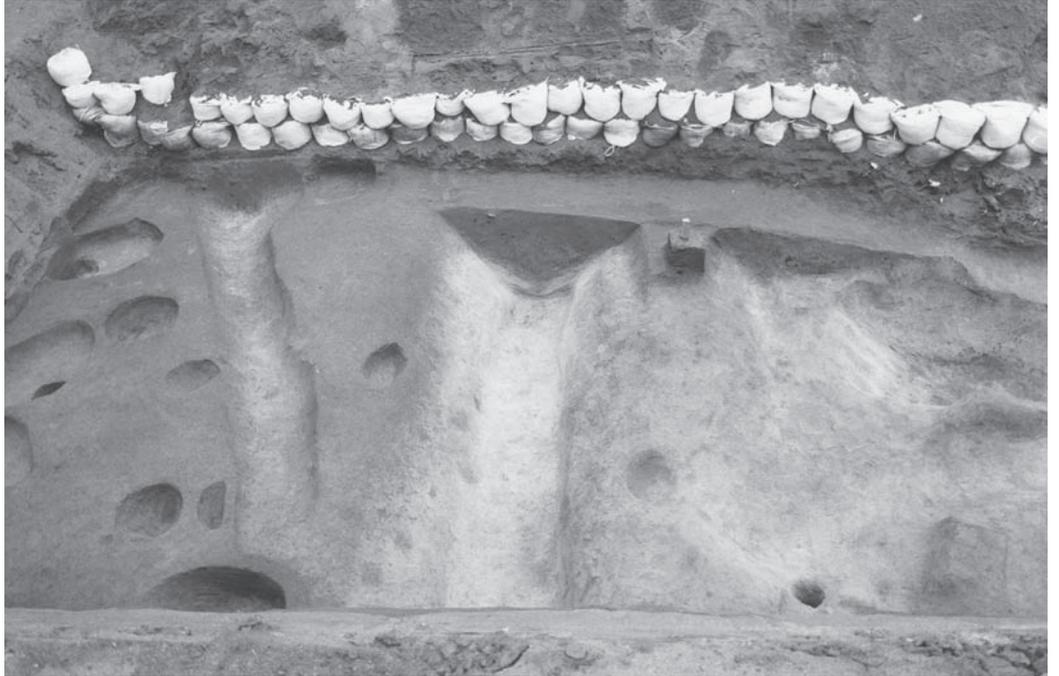


SE049 (南東から)

調査区南側
SD040・041・015
(南東から)



調査区北側
SD050・040・041
(北西から)



SD040土層 (北西から)





出土遺物

報告書抄録

ふりがな	よしづか							
書名	吉塚10							
副書名	吉塚遺跡群 第12次調査報告							
巻次								
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第967集							
編著者名	藏富士 寛							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092-711-4667							
発行年月日	2007. 03. 30							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
よしづか 吉塚遺跡群	ふくおかけんふくおかし ほかたく 福岡県福岡市博多区 かたかす 堅粕5-440-1	401307	0123	33° 35′ 41″	130° 25′ 23″	2005.12.09 ～ 2006.01.20	126.1	共同住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
吉塚遺跡群	集落	中世 奈良 古墳	溝 6 土坑 20 井戸 2	輸入陶磁器 国産陶磁器 須恵器 土師器 弥生土器				
要 旨	<p>当調査地点は、御笠川河岸に存在するにもかかわらず、安定した砂丘面と遺構を検出することができた。このことは、御笠川対岸にいたる、遺跡のさらなる広がりを示唆しているのかもしれない。また、今次調査においてはさほど顕著にみることはできなかったが、遺構面切り下げの際、弥生時代から古墳時代に相当する多くの遺物を採集しており、これは、周辺において当該期の遺構が数多く存在していたことを示しているのだろう。</p>							

吉 塚 1 0

— 吉塚遺跡群 第12次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第967集

2007(平成19年)年 3月30日発行

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 ソウヤマ印刷
福岡市博多区中呉服町10-5



遺跡名	遺跡略号	調査番号
吉塚遺跡群第12次	YSZ-12	0555

